

令和5年度（第45回）

少年の主張 石川県大会

発表記録集

伝えよう！21世紀を生きる君たちの熱いメッセージを



と き ■ 令和5年8月27日(日)

ところ ■ 石川県青少年総合研修センター

石川県 石川県教育委員会 石川県健康運動推進本部
独立行政法人 国立青少年教育振興機構

はじめに

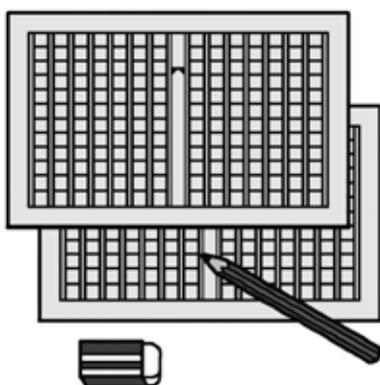
昭和五十四年国際児童年を記念してはじめられた少年の主張石川県大会も、たくさんの方々を支えられ、今年で四十五回目を迎えることができました。

この大会は、中学生が、日常生活の中での体験や考えを自身の言葉でまとめ、それを広く発表する機会を提供することにより、中学生世代の社会参加意識の醸成を図るとともに、多くの大人に現代の中学生への理解を深めてもらうことを目的として開催しております。

本大会は、加賀地区、石川中央地区、金沢市地区、能登地区の四地区から選ばれた十六名の中学生が、それぞれの体験から真剣に考えたことを力強く発表し、聴衆に大きな感動を与えました。

この記録集は、その十六名の主張を取りまとめたものです。一人でも多くの方々に読んでいただき、中学生が日ごろどのように考え生きようとしているのかをご理解いただき、今後の子ども・若者活動推進の一助としてご活用いただければ幸いです。終わりに、地区大会をはじめ、この大会のためにご尽力いただきました多数の皆様にご厚くお礼を申し上げます。

石川県健民運動推進本部



も く じ

◎はじめに

◎大会発表作品

最優秀賞

「考えない葦」は、ただの葦

金沢市立長田中学校

三年 松末 明生……………3

優秀賞

誇りある自分になるために

石川県立金沢錦丘中学校

三年 東 真菜葉……………4

星のような言葉の中から

白山市立北星中学校

三年 平村 晴佳……………5

奨励賞

学ぶ意味

金沢大学人間社会学域学校教育学類附属中学校

三年 川口 琳可……………6

多様性を受け入れる

内灘町立内灘中学校

三年 石本 千陽……………7

私にしかできないこと

小松市立芦城中学校

二年 若林 明依……………8

感謝

加賀市立錦城中学校

三年 宮崎 碧……………9

自分らしく老いるために

金沢市立紫錦台中学校

三年 山本 莉音……………10

武器をメガホンに

輪島市立東陽中学校

三年 登岸 結衣……………11

友達と仲良くするために

七尾市立七尾東部中学校

三年 達 萌々菜……………12

海への礼儀

加賀市立東和中学校

三年 沖山絹布子……………13

ジブンニハクシユ!

白山市立北辰中学校

三年 細川 咲……………14

「私」という性別

小松市立御幸中学校

三年 橋爪 にご……………15

積極思考で人生を豊かに

白山市立北辰中学校

三年 江川 遼……………16

個性を生かすには

七尾市立七尾東部中学校

三年 川下 真央……………17

才能に勝つ

七尾市立能登香島中学校

三年 出崎 絢葉……………18

(優秀賞、奨励賞は発表順に掲載)

◎審査員講評……………19

石川県教育委員会事務局学校指導課 課参事 東原 修身

◎少年の主張石川県大会概要……………20

◎石川県大会審査基準……………21

◎地区大会概要……………22

◎第45回少年の主張全国大会

「わたしの主張2023」 内閣総理大臣賞受賞作品……………26



最優秀賞 「考えない葦」は、ただの葦

金沢市立長田中学校 三年 松末 明生

「松末、今度お前の読書感想文を金沢市のコンクールに推薦するか
ら。」

中学一年生の夏、自分では全く予期していなかった言葉を担任の先生にかけてもらってから、僕は初めて「文章を書く」ということを意識するようになりました。そして、結果的にその読書感想文がコンクールで入選して以降、その嬉しさもあり、自分の中で文章を書くことに、俄然興味と情熱が湧いてきたのです。それからというもの、誰かに依頼されたわけでもない文章を時々僕は書いています。

書くきっかけやテーマは様々です。その時に読んでいる小説や漫画、テレビで観た映画やアニメなど、自分がその時に触れた作品について自分なりに考えて書く行為は、真剣に向き合えば向き合うほど難しく、いつも難航してしまいます。ですが、それを乗り越え、短くとも一つの文章を書き上げることができたときは、何とも言えない達成感を味わうことができ、それが次への意欲へとつながっています。そして、何度も文章を書いていくうちに、僕は文章を書くことが自分自身の思考力を高めてくれると実感しました。

僕たちは、特に意識していなくても普段からいろいろなことを考えています。しかし、それは漠然としてあまり具体的ではありません。それをより具体化するために有効な手段が、「文章を書く」ことだと思っています。なぜなら、自分で書くという行為は、書こうとする内容について自分自身の引き出しをすべて開放し、深く考え、整理できなければ成立しないからです。その結果、目に見える文章という形に変えることで、客観的に自分の考えを理解することができまます。こうしたプロセスの繰り返し、思考力を高めることにつながるのではないのでしょうか。

ところで、最近、テレビのニュースで気になったことがあります。大学生の卒業論文の制作について、AIの使用を禁止する大学が出てきているというものです。僕は実際にAIについて触れたことがなく、仕組みについても詳しいわけではありませんが、最近のAIの進歩は目覚ましく、簡単な単語をいくつか入力するだけですぐに論文を製作してくれるそうです。つまり、AIを利用する側の人間は、書

くことについて何も考える必要がないのです。

人工知能と呼ばれるAIは、人間と同等、もしくはそれ以上の精度でさまざまな作業の実行が可能です。そのため、あらゆる分野で有用な技術であり、生活や産業の仕組みを根本から変える可能性を秘めています。ですから、AIにより僕たちの生活が一層便利になっていくことは、疑いようがありません。しかし、その便利さを追求するあまり、AIへの依存度が強まってしまふ危険性もあります。その結果、僕たちは自分自身で考える機会を失ってしまうのではないのでしょうか。

この状況は、作家「星新一さん」が描いた『声の網』という作品と似ています。この『声の網』では、コンピューターが搭載された電話に、気づかない間に人間の思考や行動が支配されてしまふ世界が描かれています。この作品が描かれた一九七〇年代当時はSF作品として描かれましたが、二〇二三年現在、この作品は現実味を帯びています。もしかすると、今後本当に『声の網』のような、人間の思考機能がAIに代替され、人間が思考や行動を放棄する未来が到来するのかもしれない。

しかし、待ってください。文章を書くことは自分と向き合い、思いを巡らせ、自分の思考の幅を広げてくれます。こんなにも面白いことをAIに任せてしまうことは、勿体なくはないのでしょうか。僕たちが普段楽しんでいる映画や聴いている音楽、好きな小説や絵画など、生活を豊かにしてくれるものは、遠い過去から多くの人々が無限に想像し、挑戦し、考え抜いてきたからこそ産まれてきたものです。何もなるところから何かを産み出す力こそ、他の生き物にはない人間だけの力であり象徴であると僕は信じています。AIを使うことでその力が弱まってしまふことはとても残念ですし、AIによって便利な未来になることが、必ずしも幸せを運んでくれるとは限らないと僕は思うのです。だからこそ、これからは僕は筆を執ることをやめず、あらゆることに知的好奇心を持ち、一人の「考える葦」として自分の頭で考え続けていきたいと思っています。

さて、みなさんはどうですか。「考える葦」か「ただの葦」か。どちらになることを選択しますか。



あなたは自分に誇りをもっていますか。

私の母は、日本舞踊を教える仕事をしています。そのため、私も物心ついたときにはすでに日舞が生活の一部となっていました。

小さな頃は、母の真似をしていれば例え上手ではなくても「頑張ってるね。」とたくさんの方が褒めてくださいました。しかし、だんだんと大きくなるにつれ、同い年のいとこの差が広がってきました。

いとこは飲み込みが早く、言われたことはすぐにできる。一方私はやっっているつもりだけでできていない。そして、ついには日舞が嫌いになってしまったのです。小さい頃は誰も求めなかった「覚える力」「表現する力」「考える力」、これら全部が重くのしかかってきました。

また、母の舞台などで知り合いに会うとみんなが口々にこう言います。「日本舞踊やってるの。お母さん上手なものねえ。」

「ねえ。」の後には「あなたももちろん上手なんですよ。」という言葉が隠れているように思え、うまくできないことへの焦りや、母への申し訳なきが心の中でどんどん大きくなる一方でした。

そんな私を見て母はよく言いました。「私だって日本舞踊を続けてきていいことばかりではなかったよ。」しかし、そう言われて思い返す母の姿は、振り付けを考えたり、配置を考えたりする、生き生きしていて楽しそうなものでした。私があこがれている母の姿は、日舞とともにありました。確かに日々悩みは絶えないようで、ときどき愚痴もこぼします。でも、やっぱり日舞といえ、母の楽しそうな顔が目

に浮かぶのです。

そんなある日、私は友達にこう言われました。「まなは日舞嫌いって言ってるくせに、日舞のこと話すとき楽しそうだよね。」私はハッとしました。私があんなに嫌だと思っている日舞が楽しそうに見えるのは、「私だけが日舞を知っている」という優越感からでした。しかし、母が楽しそうなのはそんなちっぽけな優越感からではありません。

そう思ったのは、母のこの言葉を思い出したからです。「やっぱり好きだからどんなことも乗り越えられる。」私はこの「好き」とい

う言葉の向こうに、母の、日舞に、そして自分の生き方に対する「誇り」を感じました。母がいつも嫌な顔を見せないのは、きつと「誇り」をもっているからなのだと。私が母の、踊りを考え作りあげていく姿に心が躍るのは、母が何よりも、日舞とともにある自分の生き方に「誇り」をもっているからだ。これまで数え切れないほどの辛い思いもしたでしょう。それでも、一つ一つ積み重ねてきたことの自信と誇り。これらが、母を支えているのです。

私はこれからも、日舞を好きになったり、母のように「誇り」をもったりすることはできないかもしれませんが、母の日舞への思いを理解したことで、私だって経験を積み、辛いことがあっても、それでも自分自身を誇れるようになりたいと思うようになりました。それは、考えている何十倍もの苦労や喜び、多くの経験の上であって、母のように愚痴がこぼれることもあるでしょう。後で「こうじゃなかった。」と思うかもしれませんが、そんなときは自分自身に問いかけたことです。「今の自分に誇りをもってる？」強くうなずくことができるように、まずは小さなことから自分を変えていこうと努力しています。周りが気づかないことに目を配ったり、みんなが躊躇するようなことに、勇気をもって一歩踏み出したりすることです。やるべきことを当たり前に頑張ることになりたい自分に近づいていく。これからの、自分自身に「誇り」をもてる人になるために。



優秀賞 星のような言葉の中から

白山市立北星中学校 三年 平村 晴佳

この気もちはなんだろう
目に見えないエネルギーの流れが
大地からあしのうらを伝わって
多くの腹へ胸へそうしてのどへ
声にならないさけびとなってこみあげる
この気もちはなんだろう

これは、谷川俊太郎の「春に」という詩の一部です。この詩を、私は音楽の授業で知りました。私達くらい年齢の、矛盾を含んだ言い表しようのない感情がそのまま描かれており、初めて聞いたとき涙が出そうになったのを覚えています。

私が「言葉」というものについて考えるようになったのは、ひどく落ち込んで自分に自信がなくなったとき、言葉が唯一の道標になったからです。たった一つの単語ですら、計り知れない力を持っています。私の所属する吹奏楽部は、ここ数年力をつけ、たくさんの実績を上げています。その中で、以前から人付き合いが極端に苦手だった私も、幸運にも素晴らしい先生や個性豊かな先輩、同じ目標を持つ仲間と出会い、部活動に打ち込んで過ごしてきました。昨年の秋、先輩の引退が近づいた頃、私は憧れの気持ちからいくつかあるリーダー役に就きたいと密かに思っていました。しかし選ばれた中に私の名前はありませんでした。部活動にかける思いの強さは誰にも負けない自信があったので、なぜだかわからず、しかも大役を負った仲間を素直に応援できない自分のことが嫌になり、長い間悩みました。楽しいふりをしながら部活に通ううちに、自分に何が足りないのか、自分は吹奏楽部に必要なのか、果ては自分が本当に部活を好きなのかさえわからない日々が続いたのです。

その頃、社会の授業で「排他的」という言葉を知りました。意味がよくわからなかったので家で調べたら、【排他的】とは、特定の間、組織、主義主張だけを優遇し異なる価値観に不寛容な様子、とありました。その説明がすっと頭に入ってきたとき、私はこれまでの自分がずっと「排他的」であったことに気づいたのです。自分がいつも中心

で、どうしたら自分の考えをわかってもらえるかしか考えてこなかった。また、部長に選ばれた仲間が「排他的」とは正反対なことにも気付きました。彼女は周りをよく見ていて、明るく気遣いもでき友達も多い。そして「排他的」の対義語が「協調」「融和」だということもそのとき知りました。この一連の気付きは私にとって大きな衝撃であり、初めて見つけた自分の姿でした。

何かが大きく変わったわけではありません。でも、私を表現できる言葉を見つけた、ただそれだけで息苦しさが消え、しかも私の目指すのがどんな姿なのかはつきりしました。私は今、誰よりもこの部活が好きだと、もう一度胸を張って言えます。

そしてさらにいろいろな言葉を調べるうちに、考えはどんどん広がっていききました。言葉とは、これまで生きてきた皆さんの人が作り、使ってきたもので、私の思いを表す言葉があるということは、今はもう亡くなった人や今どこかに生きている人の中にも、私と同じ思いをしていた人が必ずいたのだ、と。その人達が自分の思いを伝えようと生み出した言葉や文章がある。冒頭の詩のようにずっと昔に言葉として表現されたものが今も生きている。だから、自分を表すための言葉はどこかに必ずあるのだと思います。そしてこれは、人類が言葉を使い始めてから何千年、何万年と続く流れなのだと思いついた時、壮大さに驚かされました。

さらに、ある先生と話していて気付きました。新しく発見された星や科学的な現象は、それまでもあったはずののですが、発見され名前がついて初めて「本当に存在する」と認められます。人間やその心に似ていると思いませんか？この感情は確かにあるのに、名前がわからなければ、得体が知れないし、また自分を変えたくても、どう変わりたいのかわからないから延々と迷う。けれど、それは先人たちも同じだったはず。星の数ほどある言葉の全てを知ることはできないけれど、その中のほんの一握りのうちに、自分を表現できる言葉を見つけ出すことができたなら何かが変わるかもしれない。それを信じて、歩んでいこうと思います。言葉との素敵な出会いを道標として。



奨励賞 学ぶ意味

金沢大学人間社会学域学校教育学類附属中学校 三年 川口 琳可

「私たちって何のために勉強してるんだろう？」とある時私は友達から質問されました。私は何も答えることができませんでした。受験の成功のためか将来の安定のためかそれとも自己満足のためかはつきりとした答えはでてきませんでした。困った私は友達に同じことを尋ねました。すると友達は「何のためかも分からないのにひたすら勉強し続けることに意味ってあるのかな？進路も結婚相手も職業も全部決まっていれば楽なのに。」と言ったのです。本当にそうでしょうか？

そんなことを考えながら帰宅し、いつものようにネットニュースを見ることにしました。するとある記事が私の目に留まりました。それはアフガニスタンの女の子達について書かれたものでした。その記事の前半にはアフガニスタンの女の子達は女性差別を受けていて、過酷な環境で長時間労働させられたり、幼くして結婚させられ家事や育児をするよう強いられられていたり、と書かれていました。これを見て私はひどいなと思いました。あえて言うならば「ひどいな」としか思わなかったのです。ですが後半の内容を読んで私の気持ちは大きく変わりました。

後半にはこう書かれていました。アフガニスタンの女の子達のほとんどは十分な教育を受けておらず知識がないために、自分が差別されていることに「気付いていない」のだ、と。つまり、彼女たちは知らないところで、チャンスも、大切なものも、失いつつあるのです。失っていることにさえ、気付いていないのです。こんな事は絶対に許せないと思いましたし、それと同時にこの現状を変えたいとも強く思いました。

しかし、ここで私はある事に気付きました。「私も彼女達と同じなのではないだろうか？」と。記事を読んで、もしかしたら自分も知識がないため「気付いていないだけなのではないか」と恐怖感をおぼえました。それと同時に「学びたい」と強く思いました。もともと多くを知りたい。学びたいと心から思ったのです。そして私は彼女達にも「学べる環境」が与えられてほしいと思いました。もし彼

女達が十分な教育を受けたなら、彼女達自身ができることや世界を見る視野が大きく広がります。きっと色のない人生に美しい色がつき始めることでしょう。

「彼女達自身が、自分の置かれている環境の問題点に気付いていないのなら、そのままの方が幸せなのではないか？」と思う人もきっといるでしょう。

皆さんはどう思いますか？

私なら悲しい事実であっても、知らないでいるより知りたい、そして、自分で考え、自分で選択したいと思います。だからアフガニスタンの彼女達にも知ってほしいのです。その上で、今まで通りの生活を望むのならそれも良い選択だと思います。

私は、皆が自由に選べる選択肢を持ち、自分の思う幸せを、自らつかめる世界を望みます。そのためには、世界中すべての人が、十分な教育を受けられることが必要です。そんな世界を実現させるため、私をもっともっと学び、多くの人と学ぶことの喜びや大切さを分かち合いたいと思います。



奨励賞 多様性を受け入れる

内灘町立内灘中学校 三年 石本 千陽

「かわいいそう」妹がほつりと、私の傍らでつぶやきました。妹は小学二年生です。たまたまつけたテレビの画面に「車いすラグビー」の大会の様子が映っていました。私はその選手たちの力強さと車いすがぶつかり合う迫力から目が離せず、夢中になって見ていました。そんなときでした。妹が「かわいいそう」と言ったのです。驚いて思わず「なんで？」と聞いたら、妹は「この人たちは足が動かないから。」と答えました。でも私にはそう同情する気持ちが少しわかりません。最近まで私も、障害者スポーツを見るたびに「かわいいそう」と思っていたからです。

私が障害者に対する見方を変えたのは、三年の英語の教科書で紹介されている国枝慎吾選手の言葉がきっかけでした。そこには「ときどき人々は車いすテニスをすばらしいと言う。その言葉は僕を不快にさせる。僕たちは他の人々と同じようにテニスをしているだけだ。」と書かれています。私は無意識のうちに障害者と自分の間に境界線を引き、もしかしたら無意識のうちに誰かを傷つけていたのかもしれない、と思いました。このことに気づいた時、今までの自分をとんでも恥ずかしく思いました。

現在、多くの人々が口にする「多様性」英語では「Diversity」意味は、ある集団の中に異なる特徴、特権を持つ人がともに存在することです。私たちは互いに助け合い、認め合っていくことで共に成長することができるとのことです。

では、多様性を認めなかったらどうなるのでしょうか。現在、いじめが原因で自殺する人の割合が大きくなっています。SNSの中での誹謗中傷に耐えられず自殺する人もいます。これは多様性の「互いを認めて協力し世界を発展させる」という考えに反しています。いじめは人を傷つけ、多様性を社会から排除していつています。

では、多様性という考えを広めるにはどうしたらよいのでしょうか。私は自分とは違う考えにふれ、理解しようとするのが最も重要だと思っています。文化、宗教、人種、性別、価値観、全てが同じ人がいません。家族さえ、考え方が違います。もともと外国に興味があった私は両親に頼んでJAPAN TENNTという企画に参加し、カンボジア出身の女性を我が家にホームステイとして受け入れました。

たったの三日間でしたが国籍、文化、人種などで気になることは全くなく、むしろ姉妹のような関係になり、お別れがすごく名残惜しかったです。彼女とは今も連絡をとりあっています。この体験から私は、「多様性」を知るチャンスはたくさんあり、「差別をなくそう」という大きな目標を立てるのではなく、まずは自分ができる小さなことをやってみることが重要だと思いました。カンボジアに「Ton Ton Phenh Bon Pong」ということわざがあります。日本語で「塵も積もれば山となる」と似た意味です。ささいなことでも結果的には大きなものになります。まずは何か簡単な行動をおこすべきではないでしょうか。

私には吃音の友人がいます。彼とは学校を支えるメンバーとして出会いました。私は彼の立会演説の言葉を忘れられません。体育館に集まった全校生徒。その八百人近い人たちの目線が自分に集中している中で彼は何度どもりながらも一生懸命に最後まで話しました。「僕がここで話すには勇気が必要でした。でも僕がこうしてどもりながらも頑張る姿を見て、みんなが少しでも勇気を出してくれれば、と立候補しました。」彼はそう言いました。彼の演説の後には、割れんばかりの拍手がおこりました。感動して泣いている人もいました。

私は国枝さんや友人が自分を卑下しているように見えません。むしろ強く、堂々として自分の生き方に誇りをもっているように思います。二人の共通点は、目の前のことに全力で一生懸命に取り組んでいるところだと思います。その一生懸命さが人に感動を与えるのです。

彼らのような人が増え、今後ますます世の中は多様性を尊重するために変化していくと思います。来年から私の学校は女性でもストラクスを着用できるようになります。

「自他共栄」校長先生が全校集会のたびにくり返しおっしゃる言葉です。いつのまにかみんながその言葉を自然に口にするようになっていきます。自他共栄とは、自分も相手も大切にして互いに高め合う、という意味です。

そういう思いやりのある、心づかいができる集団になるように、私は生徒会長として一人の人間として、努力していきたいと思っています。



奨励賞 私にしかできないこと

小松市立芦城中学校 二年 若林 明依

みなさんには、自分の背中を押してくれるような大切な言葉はありますか。私にはあります。それは、母が私に向けて言った、「明依にしかできないんだよ。」という言葉です。このシンプルな言葉に、どんな深い意味が込められているのか。私は、ある経験から知ることができました。

私は、小学校四年生から中学校一年生まで役者として、子供歌舞伎に出演していました。はじめはセリフのない役をしていましたが、もっと目立つ役をしたいと思い、努力を重ね、小学校六年生では、主役である弁慶を目指すようになりました。オーディションでは、朗読などの審査があり、私は一生懸命取り組みました。とうとう一カ月後、封筒が届きました。結果は、「義経」。しばらくはとてもショックでした。

ある時稽古中に、先生から「君は義経にピッタリだ」と言われました。私は、どこがピッタリなのか分かりませんでした。義経はどんな人なんだろう。私は義経について研究し始めました。義経の本を調べたり、今までの先輩の演技やプロの演技の動画を見たりしました。そうすると色々な義経像が見えてきました。そして、自分はどんな風に演じたらよいのだろうかと思ってきました。そんな中で、ある時ハッと気が付いたのは、私が思ったそのままの演技をすることで、初めて自分の役になるのだということです。それに気づいたとき、シヨックという気持ちよりも自分にしかできない義経を演じたいという気持ちのほうが大きくなっていました。

本番当日の朝、私はとても緊張していました。そんな時に母がかけてくれた言葉が、「明依にしかできないんだよ。」という言葉です。私は「あなたの演じる義経をお客さんは観に来ているんだよ。」「あなたにしかできない義経があるんだよ。」と言われているように感じました。その言葉に勇気をもたらした私は、目線を上げ、動きを大胆にし、堂々とした義経を演じることができました。母の言葉に背中を押され、私は「自分の義経」を、私という個性を出して表現することがで

きました。

また、歌舞伎の稽古中、自分の動きに自信を持てなかった時期に、同じ役をしていた友達にアドバイスを求めたことがあります。その時、意外にも友達も私にセリフ回しのアドバイスを求めてきました。何でもできると思っていた友達にもできないことがあるのだということを知りました。

さらに、舞台では役者以外の、囃子方や裏方など、いろいろな役割があります。実は、私の姉も囃子方として参加していました。姉は舞台で叩いている鼓を私に叩かせてくれました。しかし、姉のようにきれいな音を出すことはできませんでした。そのとき姉は「私は明依のように演技ができないよ。」と言いました。姉は鼓が得意で、私は演技が得意。舞台上では、たくさんの人が個性を生かした役割を担って協力しているのだとわかりました。

全ての役割を一人で全部することはできません。そして、その役割の中には、自分ができないこともあるはずですが、だから、自分のできることを、それができない人のためにし、自分ができないことは、それができる人に助けてもらいます。

このように、誰かと協力するときには、自分の個性を隠すのではなく、自分ができることを堂々とするべきです。もし自分のしたことが他の人とは違っていても、それを恥じる必要はありません。なぜなら、それは誇るべき個性だからです。相手と違うことをすることは、相手にはできないことができる証拠です。

みなさんも自分の個性を表に出してみてもどうでしょうか。各自が個性を生かして助け合う。こうすることで、長所も短所も補い合える温かい関係が作れるはずです。



「ありがとう」

皆さんは、この五文字を誰に伝えたいでしょうか。家族、友達、恋人、先生……。私は、亡き恩師に伝えたいです。

その恩師とは、小学生の頃のサッカーコーチです。彼は、私が小学校六年生の時に急病で亡くなりました。それは本当に急すぎる出来事で、最初にその訃報を耳にしたときは、まるで悪夢の中にいるような感覚になりました。つい五日前までは同じ空間を共にしていた人が突然、私達の前からいなくなってしまうことは、当時小学生だった私には、とても辛いという言葉だけでは言い表せないほどの深い悲しみを覚える出来事でした。

一言で言うと、彼は本当に温厚な人でした。サッカー選手としての技量はもちろん、一人の人間としての礼儀、そして、仲間を思いやり共に協力することの大切さなど、私達を人として一回りも二回りも成長させてくれた存在でした。そして、何より私達にサッカーをすることの楽しさや喜びを与えてくれた人でした。私達にとって、彼の存在は非常に偉大でした。

その恩師にたった一つだけ後悔していること。それは彼の最期に、私達を今まで立派な一人の人間として、そして、サッカー選手として育ててくれたことへの、「ありがとう」の一言を伝えられなかったことです。このことだけはいくら悔やんでも悔やみきれません。確かに、日頃から練習終わりに「ありがとうございました」と言っただけはいいました。しかし、それは本当に気持ちのこもった「ありがとう」とはほど遠く、日々の挨拶程度でしかありませんでした。当時は気恥ずかしくて言えなかったのです。彼がいなくなってから三年が経った今でも後悔しています。

私は、この忘れがたく、辛く悲しい経験から一つの学びを得ました。それは、できるだけ周囲の人にたくさん心のこもった「ありがとう」を伝えるということです。ありきたりなことかもしれませんが、意外とできないことです。私達は大切な人を失ってから初めて、その人の

大切さや偉大さに気づかされるものです。だから、私はその時以降、意識的に、周囲の人に心のこもった「ありがとう」を伝えるようにしています。

また、私はこの学びを得たと同時に、彼に一つの誓いもしました。それは、彼が生前私達に教えてくれたように「サッカーの楽しさ」を将来のサッカー少年にもしつかりと伝えていくことです。だから、私はかつての彼と同じように、錦城FCのコーチになって、選手を目線で見られるようになりたいです。そして、彼の分まで子どもたちにサッカーの楽しさを教えていきたいと思っています。

また、私は選手の傍ら審判員としてもサッカーに関わっています。時に、試合が終わった後、選手から「審判ありがとうございました」と言ってもらえることがあります。選手から心のこもった「ありがとう」をもらえると、サッカーに関わっていて本当に良かったとつくづく思います。サッカーでの多くの経験は、私に「感謝の尊さ」を教えてくださいました。

皆さんが意識していなくても、日常にはたくさんの「ありがとう」を言う機会があります。今日家に帰ったときや学校に行ったとき、家族や友達、先生方、地域の方々などに、たくさん心のこもった「ありがとう」を伝えるようにしてみてください。私のようにいつ大切な人に言えなくなる日が来るかわかりません。

この世界が心のこもった「ありがとう」で溢れますように。それが私の願いです。



皆さんは、老いることが怖いと感じますか。「老い」とは、しわが増え、体が思い通りに動かなくなり、死に向かっていく。そんな怖いものだと、私はずっと思っていました。

十歳の頃、「地獄」という絵本を読みました。死後の地獄について書かれたその絵本を読んだ時、「死にたくない！」と強く思いました。そして、八十九歳の曾祖母に、とある質問をしました。

「ひいおばあちゃんは、死ぬのが怖くないの？」
とても失礼な質問に、彼女は快く答えてくれました。

「別に怖くはないよ。ここまで年をとると、怖いものなどほとんどないね。」

その答えを聞いて、私は本当にびっくりしました。年をとると、怖いものがなくなる。多くの人が恐怖している死さえも。その考えは、あの頃の私にとって疑問でした。

その疑問が答えへと変わったのは、今年の二月です。私は、老人ホームに入った曾祖母に、久しぶりに会いました。そこには、黒く染めることを忘れた白髪頭に、しわだらけの顔で、車椅子で押されている曾祖母がいました。私は彼女を見た瞬間、なんとも言えない切なさが込み上げてきました。しかし、彼女はずっと笑っていました。私や母、自分の娘さえも忘れているだろうに、本当に楽しそうに。

その彼女の笑顔を見て、死が怖くないと言っていた理由がわかった気がしました。彼女はすでに、死を受け入れる準備ができていたのではないのでしょうか。彼女はお見合い結婚をさせられ、営業していた会社も倒産するなど、大変な経験をしたそうです。苦勞をたくさんして、周りと乗り越えてきたからこそ、人との繋がりが生まれました。その繋がりが、何年経っても彼女の人生を色鮮やかにしてくれたことで、彼女は幸せだったと思います。

人生とは長いのです。長い長い人生の中で、人間は、喜びや嘆き、恐怖、安らぎなど、たくさんの感情と経験を通して老いてゆき、人生を豊かにしてゆく。生きている時間を自分なりに思いっきり過ごし、人

生に満足していければ、自分が年を重ねていくことを受け入れる準備ができる。私はそう考えました。

そのために、まず、老いについてもっと理解しなければなりません。年をとるにつれてしわが現れるのが嫌だからなくしたいと考える人がいるかも知れませんが。しかし、それは本当の自分なのでしょうか。私は一年生のときの道徳の授業で、しわがいっぱいで、硬そうな手の絵を見ました。その手は、画家の木下普さんが描いた記憶の中の母の手だったそうです。それを見て、しわは、「経験の証」だと思いました。たくさん苦勞をして、それが体に現れたものがしわです。故に、若くいることが美しいのではなく、経験を重ね、内面が充実していくことに価値がある。そう考えられると、老いへの怖い印象もなくなつて、ありのままを生きることに素晴らしさに気づけるでしょう。

そして、日常の小さな幸せを感じることも大切だと思います。これは、決して簡単では無いと思います。しかし、家族や友達に時間を使おう。趣味を見つけて全力で楽しむ。今日嬉しかったことを書き出してみること、身近なことからでも幸せを感じることはできます。

これから私は、たくさん大切な人と出会い、そして永遠の別れをしなければならなくなるでしょう。だからこそ、私は今できることをたくさんしていきたいです。身近な人には感謝を伝え、たくさん遊んで学び、色々な経験をしていきたいです。そして私は年をとつても、曾祖母のように笑っていたいです。

みなさんも、今しかできないことにたくさん挑戦し、日常の幸せに目を向けてみませんか。

そうすれば、「老い」にこだわるよりも、経験がある自分しかできないことや、周りの人の幸せを願うことが、中心になるはずです。自分らしく生きていけるように、今を精一杯歩んでいきましょう。人生の最後を迎える瞬間、笑っていられるために。



奨励賞 武器をメガホンに

輪島市立東陽中学校 三年 登岸 結衣

「コメントって別に見た結果意見を書いていい場所ではあるけど、悪口を書いていい場所じゃないからね。机もそうじゃん、ペンを走らせれば悪口を書いてしまう場所。コメント欄もそういう場所だと思ってる。書いてしまうけど書かないほうがいいもの。」

これは、約四年前、三年A組というドラマが放送されていた頃、私の好きなインフルエンサーが言っていた言葉です。この言葉を初めて聞いたとき、私は小学六年生。当時は親のスマートフォンを使用していたため、そんなこともあるんだなどどこか他人事のように思っていました。中学生になってから、自分のスマートフォンを持つようになり、SNSを扱うことが多くなりました。ある日、私の好きなインフルエンサーの動画に「ホームビデオを垂れ流すな。つまらない。」とアンチコメントが書かれているのを見て、「なんでこんなことを書くのだろう」と私は本人でもないのに心苦しくなりました。「ペンを走らせれば悪口を書いてしまう場所」それまではよくわからなかったこの言葉の意味をやっと理解することができたのです。

誹謗中傷というと、有名人が受けるものであり、私達には無縁だと感じる人がいるかもしれませんが、ですが、ラインなど多くの人が使うメッセージアプリでも、会話中に誤解が生まれることがあります。友達と楽しくやりとりをしているときに私の冗談に対して「は？ありえんわ」と返事が来ました。この返事に「怒っているのかな」「その言い方はないんじゃない」と思ったことがあります。場合によってはこのようなちよつとしたすれ違いが大きな溝を生み、いじめにつながることもあります。

また、SNSは匿名でも使用できます。ありのままの自分でいられる場、誰にも言えない悩みを持っている人にとっては唯一相談ができる場にもなる。そんな場所での心無い一言は、誰にとっても大きな傷として心に残ります。

匿名で、便利で、身近なツール。だからこそ、決して他人事として考えないでほしい。自分の発言にしっかりと責任を持ってほしい。そ

れに苦しんでいる人が今この瞬間もいることを忘れないでほしい。SNSの利用者が低年齢化している今、それらとしっかりと向き合っていかなければなりません。

SNSを利用するすべての人に伝えたいことがあります。それは、心無い一言が誰かを追い詰める「武器」になる、ということです。物事を感じ方は人それぞれです。SNSは相手の表情や言葉の緩急、抑揚が見えない「文字」でのやり取りです。そのため、自分の思いを正確に伝えることはとても難しいです。

ですが、私は「人を傷つける武器」を「応援団のメガホン」に変える方法があると思います。それは、「自分がもしこの言葉を言われたら：」と一度立ち止まって考える、ということです。「はやくやれよ」と「時間ないかもしれないけど、間に合うように頑張ろう！」同じ意味ですが、皆さんはどちらの言葉をかけられたいですか？おそらくほとんどの人が後者を選ぶと思います。同じ意味でも言葉遣いで印象が大きく変わります。文字だけで正確に伝えるのが難しいからこそ、どう伝えるのが良いか、直接話するときより文末や書き方に気をつける必要があります。「この言葉は言っていないかな」「この方が傷つかないかも」一度立ち止まることで、冷静になり、心無い一言が心強い一言へと変化するかもしれません。

SNSで元気をもらう人が増え、傷つく人が少しでも減るように、自分事と考えてみんなが気持ちよく使えるツールにしていきたいです。



私はよくお互いのことをいじり合いながら、友達と楽しく話している。いつも笑い合っていて、その場が終わるので、友達をいじることについて、深く考えたことがなかった。

ある日、一人の男子がクラスメイトをいじって、みんなの笑いを取っていた。その二人は仲が良いし、いじられている本人も笑っていたので、特に問題はないと思った。しかし、しつこくいじりが続くと、そのクラスメイトも「本当にやめて。それ違うから。」と笑いながらも、いじることをやめてほしいと促した。実際に彼の話を聞くと、事実とは異なることでいじられていた。勝手に好きな人を決めつけられ、笑いのネタにされて、きつと嫌な思いをしたのだと思う。好きな人と決めつけられた女子も「本人も違うって言うのに、いじり続けてくるから、みんなに誤解されるし、私にも迷惑がかかっている。」と言っていた。誰かをいじること、いじった本人は面白くても、いじられている本人や、その周りの人は嫌で迷惑がかかることもある。

私も友達に嫌な思いをさせているのかもしれないと思い、友達との関わり方を変えてみた。だけど、相変わらず仲の良い友達は私のことをいじってくるし、そのいじりに対して私も嫌な気持ちにはならなかった。結局いつも通りの関わり方に戻った。

この違いは何だろうと考えてみた。まず、いじられることが苦手だという人もいると思う。いじられるのが大丈夫な人でも、どんなことを言われてもいいわけではない。私だってそうだ。友達にいじられるのは嫌じゃない。相手も自分も楽しかったり、面白かったりするならそれでいいと思う。けれど、好きな人のことでいじられるのは嫌だ。家族の事情やテストの点数、部活動のことなど、いじられたら嫌だなと思うことはたくさんある。

よく考えてみると、いじりの境目は人それぞれ違うから難しい。本当なら、いじるという行為自体やめた方がいいのかもしれない。少し間違えただけで相手に嫌な思いをさせて、相手の人権を無意識のうち

に侵害しているかもしれないと思うと、怖くなった。友だちとの関わり方をもう一度考え直してみようと思った。

川崎市のHPには「お互いの人権を大切にすることを。日常生活の中で無意識に行っていることが、人権を侵害していることもあり、振り返る機会を持つこと。相手の背景を想像して、一人ひとり違うという意識をもち、異なる立場の人の意見も受け入れること。この三つがすべての人の人権を守るために必要である。」と書かれていた。きつと、いじっていたクラスメイトも、人権を侵害しようと思っただけではないと思う。ただ、自分の視点だけで物事を見たり、考えたりしていると、今回のいじりのように嫌な思いをする人たちが出てくる。そうならないためにも、自分と相手は違うということ意識して関わっていくことが大切だ。

これから学校生活を送っていく上で、無意識のうちに人権を侵害していないかを定期的に振り返っていきたい。私にとって友達は、学校生活を送る上で必要不可欠な存在だ。そんな友達と、この先も仲の良い関係が続けていくためにも、お互いの人権を大切にしていこうと思う。そして、中学校を卒業すれば、高校、大学、就職と、たくさんの人と出会う機会がある。その中には、私と合わない人もいるだろう。そんな時でも、相手の人権を忘れずに、うまく人と関わっていきたい。「人権を守る」ということは難しく思うことかもしれないけれど、一つの意識でも守れるものだ。ぜひ、みなさんにもお互いの人権を守る意識をもってほしいと思う。



目を閉じてみて下さい。あなたはどんな「海」を心に描きますか？
白い砂浜、透き通った水、波の乱反射。海の中では、ちよっぴりひょうきんな顔をしたカラフルな魚たちが、サンゴの周りを気ままに泳いでいる。海と言えば、私もそんなイメージを抱いていました。あの時までには…。

先日、私は家族とともに、初めて海釣りに行きました。今まで、あまり訪れることができなかった海。車の中で私は、キラキラした海のこと、頭がいっぱいでした。でも、その思いは現実を目の当たりにした瞬間、打ち砕かれたのです。

「えっ」。真っ先に目に飛び込んできたのは白い砂浜ではなく、ゴミでできた綱でした。波に打ち上げられたゴミが、波打ち際に添って、まるで一本の綱のように、太く長く続いていたのです。漁業用の綱やウキ、ペットボトル、ビン、缶、ビニール袋…。私たち人間が作り出し、無責任に捨てたたくさんのゴミがそこにはあり、ふと目に留まった網には、貝や魚が干からびてくっつき、死んでいました。抱いていたイメージとのあまりの違いに言葉を失いました。私は思いました。「一体どのくらいの生き物が、人間の出したゴミによって、貴い命を落としているのだろうか。」と。

二〇一九年。スコットランドの砂浜で十歳のマッコウクジラの死骸が見つかりました。解剖の結果、胃袋からは一〇〇キロを超えるプラスチックゴミが出てきました。消化されないゴミが胃にあると、空腹を感じる事ができず、栄養失調になったり餓死したりすることもあるそうです。このクジラの場合は、鋭利なプラスチックによって内臓がひどく傷つけられていました。

クジラだけではありません。イルカやアザラシなどの海棲哺乳類、海鳥やウミガメ、数え切れないほどの魚も、ゴミの犠牲になっていきます。また、現在、海に漂うゴミの量は、世界全体で一億五千万トン以上もあり、約三十年後には、魚の量よりゴミの量が多くなるとも言われています。現状は私たちが思っているより、ずっと深刻なのです。

人間にとっては有益なプラスチックでも、海に生きる生物にとっては有害な存在となっている。こんなことが許されるはずはありません。もしこのまま何の取り組みもせずに放っておけば、きっと大きなしっぺ返しを自然から受けるに違いありません。

でも、私たちに何ができるのでしょうか。一人が努力したところで何の効果もないのではないのでしょうか。いいえ。そんなことは決してありません。一人の取り組みは小さくても、多くの人が同じ目的を持って取り組めば、必ず状況は変えられます。大切なのはこの問題に真剣に向き合おうとするみんなの意識なのです。

江戸時代。庶民は徹底した節約生活を送っていました。着物が着られなくなると赤ん坊のおしめとして使い、次は雑巾に。その次は草履の鼻緒に、最後にはかまどの火の焚き付けとして使って、残った灰は肥料に利用する。という生活であったそうです。昔の人にできて今の私たちに出来ないはずはありません。

まず、ゴミを出さないために無駄なものを買わない。必要があつて、結果出たゴミはしっかりと分別してリサイクルやリユースへとつなぐ。また、石川県では、海のゴミを減らすための活動が既に各地で行われていますし、ゴミをアート作品として仕上げ、個展を開いたり販売されたりしている方が加賀市にはいらっしやいます。このような身近なイベントに参加したり仲間に加わったりすることでも、十分海を守ることに繋がらないでしょうか？

あなたが初めに描いた海と、未来の人たちの描く海が同じであるために、あらゆる努力し続けること。それが、生命の源「海」に対する礼儀だと言えませんか。問題の解決には長い時間がかかるでしょう。だからこそ、今日から動き出すのです。美しい海が世界中に広がることを信じて。



小さい頃、私は失敗におびえていました。失敗するかもしれないから、新しいことに挑戦するのも好きではありませんでした。でも、それは間違いだったことに気づいたのです。あの三日間で。

小学校五年生だった私は、あるワークシoppに参加しました。それはアメリカから来たキャストの人たちと二日半ダンスと歌を練習し、最終日にショーを催して発表する、というものでした。

自分で行くことにしたものの、たくさんの外国人に囲まれ、自分が喋らないといけないと思うと、

「話がわからなかったらどうしよう。」

「うまく話せなかったらどうしよう。」

と、次から次へと湧き出てくる不安に押しつぶされそうでした。

迎えたワークシopp一日目。大きな不安を抱えながら、さっそく練習が始まり、私は開始早々に衝撃を覚えました。

「ジブンニハクシュ！」

キャストの全員が、決して完璧とはいえない私や他の子の踊りや歌を、これでもかというほど褒めてくれるのです。英語でたくさん褒めてくれていることはもちろん、ある人は力のこもった日本語で、時には身振り手振りで、たくさん、たくさん伝えてくれました。

心のどこかで、

「完璧じゃないと花丸をもらえない、認めてくれない」

そう思っていた私は、その光景が衝撃的でした。そして、それが嬉しかったのです。

「完璧じゃなくてもいいのかな。」

私の考え方は変わりました。

二日半の練習を終え、ついに本番。客席にはたくさんのお客さんがいるのが舞台の幕越しでも伝わってきました。

本番が始まると、私は汗だくになるまで無我夢中で踊り、そして歌いました。間違えたところ、練習通りにできなかったところなど、とても完璧とはいえないものだったと思います。しかし、それを忘れさ

せるほどに楽しかったのです。きっと、あの瞬間の高揚感は一生涯忘れることのないものでしょう。

私は、このワークシoppを経て、完璧である必要はないと気づきました。失敗したっていい、とにかく挑戦してみようと考えられるようになりました。

そこからは、どんなことにもできるだけチャレンジするようにしました。新しく習った英単語を英語教室で使ってみたり、お父さんに習っていたスキーで新しいコースに挑戦してみたりもしました。また、修学旅行で行った奈良公園では、バス停で偶然会った海外からの観光客の方に声をかけてみました。声をかけるのは少し勇気が必要だったけれど、話してみたらとても楽しくて、思い出に残る経験になりました。

もし、私がこのワークシoppに参加していなかったら…。そう考えると、今の自分がいなかったかもしれないかもしれません。もしかしたら、この場所に立つこともなかったかもしれません。

新しい世界に挑戦すること。そこに向かつて踏み出す一歩は不安に満ちています。しかし、未知の世界はたくさんの価値観、考え方など、新たな発見に満ちあふれています。だからこそ、少し勇気を出して一歩踏み出す必要があるのです。それは、今の私たちだけにいえることではなく、これから先、大人になっても同じだと思います。

私は、これから多くの新しい世界に足を踏み入れることになりました。来年からは高校生として、その次は大学生、そして社会人として。それでも、私は失敗を恐れず前へ進んでいきたいです。もし、そこで失敗してしまったとしても、私だけが私が挑戦したことに對して、自分自身を褒めてあげたいです。そして、今まで知らなかったこと、見たことのない景色、出会ったことのない人に会って、自分の世界をどんどん塗り替えていきたいです。

最後に、これから新たな場所、新たなことにチャレンジする、あなたへ。私はまず、その勇気を褒め称えたいです。そして、あなたもあなた自身にこう言ってもらってください、

「ジブンニハクシュ！」と。



先日、LGBT理解増進法が国会で可決され、LGBTQへの社会的関心が高まっています。私は、LGBTQの問題について、男性、女性という性別に縛られず、そのままの自分を表すことが大切だと考えています。私が、このような考えを持つようになったのには、あるきっかけがあります。

私は、小さい頃から「活発だね。男の子みたいだね。」と言われていました。その頃は、この性格は長所だと思っていました。ですが、年齢を重ねるにつれ、「もっと女らしく」「女子力がない」と言われるようになりました。言った方は、「女の子は女の子らしく生きるのがあたりまえ」と思っているのですが、そう言われることは、悔しく、男子が羨ましいと思うようになりました。そして、男子と話せば自分は本当の男ではないと思ひ、女子と話せば、「私たちと同じ女でしょ」と言われているような気がして、気づけば自分で周りに対して壁を作っていました。どんな接し方が正解なのか分からなくなっていたのです。自分だけがこんな悩みを抱えているようで孤独を感じました。そして、成長するにつれ起こる体の変化も、自分の体から女だと言われているように感じ、男子と運動能力の差が開いていくことも、自分の力不足ではなく性別のせいになつていく自分がいました。そんな私の考えが大きく変わったのは、ある友達の話がきっかけです。その友達と何気ない会話を交わしているときでした。「女っていう性別があるみたいよ、にこっていう性別があるみたい。」この言葉は、世の中には男と女の性別しかないと思っていた私にとって衝撃でした。男と女、どちらかだけでなく、どちらの部分ももっているでもいい、どちらか分からなくてもいい。そのままの私でいいと言われているような気がしたのです。そして私は、男性、女性に縛られず、そのままの自分を表すことが大切なんだと考えるようになりました。

ですが、このような考え方は少数派で、LGBTQの人たちに対して否定的な人がたくさんいるのが現状だと思います。LGBTQの人

たちの中には、心と体の性別が異なる人もいます。今、この人たちが暮らしやすい社会にするためにさまざまな改革が検討されていますが、そのことを不安視する声は少なくありません。例えば、心が女だと言え、女風呂や女子トイレに入ることを認められてしまうのか、などです。LGBTQの人たちを認めることは大切なことです。ですが、LGBTQではない人たちも大勢いるのだということを忘れてはいけないと思います。どちらかだけが嫌な思いをするのであれば、お互いを認め合うことはできないのではないでしょうか。

「LGBTQ」という言葉を聞いたことのある人は多いと思います。ですが、当事者でない限りこの言葉の詳細について知ろうとする人は少ないでしょう。日本のLGBTQの人の割合は10%ほどで、左利きの人と同じくらいいることが分かっています。ということは、自分の周りにもいるかもしれません。もしかしたら自分もそうなのかもしれません。みんながLGBTQについて目を向ければ、差別や誤解は減っていくでしょう。そして、男性、女性という性別に縛られた考え方も少なくなっていくと思います。女だからできない、男だからできない。性別を理由に自分を縛らないで、言いたいことや、したいことを諦めないで、「これが私だ。」と胸を張って言える生き方を、私はしたいです。LGBTQでもそうでなくても、そのままの自分を表すことが大切。互いに認め、尊重し合う、誰もがそのままの自分であられる、そんな社会にしたいです。



皆さん、人生を心から楽しめていますか。

悩みごとや心配ごとのせいで、行き詰まっていますか。日々の問題に直面し、

「つかれたな」

「最悪だ」

なんて思うことはあると思います。僕たちは人間ですので、ネガティブになってしまう時だってあります。ですが、そういう時ほど、そんな自分を受け入れ、ポジティブに考えることで、人生をもっともっと楽しめることに気づいたのです。

僕はとてもネガティブでした。失敗するたびに自分を責め、自分はなんてダメな人間なんだ、と落ち込むのが日常でした。しかしそんなある日、僕に転機が訪れました。祖父に癌が見つかったのです。しかもその癌は、僕たちが想像しているよりも進行していました。僕は言葉が出ないほどショックを受けました。

祖父は僕の家の隣に住んでいることもあり、仲がよく、僕にとっても幼い頃から大切な存在です。家族はみんな落ち込みました。しかし、祖父自身は全く気にしていませんでした。癌が発覚した次の日も、また次の日も、楽しそうに僕に話しかけてくるのです。僕は少し不思議に思い、祖父に聞いてみました。

「なんでそんなに前向きにいられるの。」

祖父は答えました。

「落ち込んだって楽しくないやろ。」

祖父の表情から笑顔が消えることはありませんでした。祖父の楽しそうな様子を見て、僕たちはふつきれ、全力でサポートしよう、と心が決まりました。

祖父は、自分は癌でそう長くは生きられない、という事実を真正面から受け入れて、残された人生も充実させようと、これまでと変わらず、日々を楽しんでいるのです。毎日ウォーキングに行き、ご飯をたくさん食べ、一粒が大きくて飲みにくい、と嫌がりながらも薬をしつ

かりと飲み、よく眠って幸せそうに過ごしています。

そんな祖父の姿勢に僕は感銘を受けました。

何事もネガティブに捉えていた自分がなんだか恥ずかしく思えました。そして、人生、とにかく楽しんでやろう、そう決心しました。

それからは幾度失敗しても、自分の弱さを認め、何事もポジティブに考えるようになりました。ポジティブに物事を捉えることによって、見える世界が広がり、人生がとても豊かになりました。そして、だんだんと自分に自信が持てるようになったのです。

「最も長生きした人間とは、最も年を経た人間のことでない。最も人生を楽しんだ人間のことである。」これはフランスの哲学者ルソーが言った言葉です。歴史の中で、彼も人生を前向きに捉えて生きて人です。僕も、たった一度きりしかない人生を、下を向いていたらもったいない、前を向いて、幸せをたくさん見つけよう、と考えることにしました。

すると、「幸せ」は僕らが当たり前のように感じている日々の生活の中にたくさん潜んでいることに気付きました。学校に登校すること、行き交う人に挨拶をすること、友達と他愛のない会話で盛り上がることに。そこいら中にある「幸せ」を自分から拾い集めにいくと、日々が充実し、楽しくなる、と今は実感しています。

積極思考の根本にあるのは「感謝」です。

感謝することは自分自身の成長にもつながり、また、自分にも、周りの全ての人も喜びと微笑みをもたらします。当たり前のように感じてきた様々なことに感謝し、言葉にして伝えることで、人生は豊かになります。

僕たち中学生は今、人生で一番とっていいほど、新しい局面を次々に迎える時期にあります。それは様々な課題に遭遇する、ということでもあります。そんな時は、積極思考で立ち向かい、人生を最大限に楽しみましょう。



奨励賞 個性を生かすには

七尾市立七尾東部中学校 三年 川下 真央

人間には個性があります。私たち一人ひとりに好きなものや嫌いなもの、得意なことや苦手なことがあるように、障がいもその個性のうちの一つだと思います。

私は最近まで、障がいについて知らないことがたくさんありました。ですが、特別支援学校の教員をしている母が難聴の生徒を担当するようになり、私も一緒に指文字や手話を覚えるようになりました。手話ニュースを見て何の手話か当ててみたり、真似してみたりするうちに、少しずつ興味が出てきました。ユーチューブやネットを見て、生活している様子や家族の人の話を聞くうちに、「障がい」と言われている人への見方や感じ方が変わっていききました。

障がいがある人たちの中には、生まれてすぐに余命宣告される子供や、一人では生きていけないと言われ不安を抱える家族などがいます。私はそんな人たちが不安を抱えずに安心して生きられるように、その人一人一人の個性を認め、理解することが大切だと思うようになりました。私がこうやって思えるようになったのも、障がいについて発信してくれる人がいるからです。発信されたものを見ることで、私たちが励まされたり、勇気をもらったりすることもあります。

ですが、中には冷たい目で見たり、差別やいじめたりする人がいます。自分とは違うから……。うまく話せないから……。集中力がないから……。私たち人間は、もともと一人では何もできません。勉強して、体験して、初めてできるようになります。

しかし、どれだけ練習してもできないことはあります。人によってその分野でできること、できないことは違います。それも個性です。視力が弱い人が眼鏡をかけて見やすくするように、足が悪いお年寄りが杖を使って歩くように、分からないことがあつたら誰かに聞くように、人は自分だけではできないことを、人やものを使って補い、努力して可能性を広げていきます。つまり、障がいのある人と私たちは何も変わらないのです。

障がいのある人たちの素晴らしいところは、諦めない気持ちや努力

する気持ちが強いことです。余命宣告をされても、どんな環境でも必死に乗り越えようとする姿はすごいかっこいいです。

ですが、差別やいじめをきっかけに、安心して暮らせない人もいます。それはきつと、まだ知識がない人、少ない人が多いからだと思います。初めて見た知りたかったときは、少し驚くこともあるかもしれませんが。けれど、少しでも障がいについて知っておくだけで、見方が変わります。一人一人の見方を変えれば、もっと個性を出せるようになるかもしれません。また、見た目だけでは判断できない障がいもあります。荷物などに赤いヘルプマークがついていたら、困っているときに助けてあげてください。きつと、世界中の人々は、そんな温かく、平和で、自由な社会を望んでいます。一人一人の心の温かさが明るい未来へとつながっていくのです。

今の世界は、見た目だけで判断され、それが差別やいじめへとつながり、苦しんでいる人が多いと思います。まずは正しいことを知ってください。いろんな個性があることを知ってください。そして、自分の個性をうまく表現できる人が増える世界を私たちが実現していきたいと思えます。



皆さんは「才能」についてどんな風に考えますか。世界で活躍しているアスリートの素晴らしいパフォーマンスを見たとき、自分ではとうてい描けないような芸術作品にふれたとき、すらすらとどんな問題でも簡単に解いている人をまのあたりにしたとき。「いいなあ、才能があつて。」私はきまつてこう思つてきました。そして、生まれながら持ちあわせたものにはかなわない、とも感じていました。

私がバドミントンを始めたのは、中学に入ってからです。初心者の私は上手になりたい一心で、コーチから教わったことを自分なりに実践し、大会では上手な人の試合を観てまねするなど、一生懸命に練習に励んできました。そんな中、三年生が引退して迎えた新人戦。自分の思うところにシャトルを打てるようになり、上達していると手応えを感じて挑んだ試合。「絶対に勝てる。」私はそう思つてコートに向かいました。しかしながら、結果は二対〇のストレート負け。自信を持って挑んだにも関わらず、あまりにもひどい試合結果に、悔しい気持ちがあわき起こり、「こんなに頑張つて練習したのに、私には才能なかったんだ。もうバドミントンなんて辞めたい。」新人戦を終えたあと、私の頭の中はそんな思いでいっぱいでした。——その一戦から、楽しかった練習にも力が入らず、少しずつさぼりがちになっていきました。そんな風に自分の「才能」のなさを感じていたとき、ある一冊のスポーツ選手の本に出会いました。その本の中に、ボクシングで史上初の五階級制覇を達成したフロイド・メイウエザー選手の言葉がありました。

「お前らが休んでいる時、俺は練習している。お前らが寝ている時、俺は練習している。お前らが練習している時は、当然俺も練習している。」私はこの言葉に衝撃を受けました。「才能がある」と言われている偉大な選手でさえ、血の滲むような努力をしている。私の努力は自分に恥じることはない、後悔のないものだったのか。「才能」がないからと諦めていたのは逃げではなかったのか。誰にも知れない、褒められない練習、けれどもそれを死ぬ気でやる。その「努力」の結晶

こそが生まれながらの「才能」にも勝るものなのではないか、と。私はいま一度、自分に出来ることを一からやり続け、基礎的な素振り練習をはじめ、ステップの踏み方、シャトルを上げる位置など細かなところまで気をつけました。そして諦めずに、初めて勝ち取った勝利。心の底から嬉しさがこみ上げた一勝でした。この経験から、本当の実力とは才能に関わらず、その人がどれだけ努力をしてきたのかで決まるのだと、気づくことができました。

私は今、受験勉強に取り組んでいます。遠いゴールへ向かう日々の勉強は、くじけそうになることもあります。思い通りに点が取れない現実。ライバルに負けるかもしれない焦燥感。けれどそんな時こそ、また「才能」のせいにして逃げることはしたくありません。努力をくり返しながら、自分に勝つ。そして、才能に勝つ。胸を張つて「やれることは全てやってきた。」いつかそう言えるように。



本日、少年の主張石川県大会において、素晴らしい主張をしてくれた十六名の皆さん、どの発表者も中学生らしく、さわやかな語りの中に、自分の思いを込め、その思いを豊かに表現していました。

環境問題や人権問題、自分の個性や生き方など、様々な問題に、一人一人が自分自身の経験を通して向き合い、問題の解決に向けてどのように行動するのかを堂々と発表する姿に大変感心いたしました。

私も中学生の時、学校の文化祭で主張大会があり、「なぜ勉強するのか」という自分で考えた問題と真剣に向き合い、クラス代表としてたくさん生徒に向けて発表したことを皆さんの姿を通して鮮明に思い出しました。もう三十年も前のことになりますが、「なぜ、わたしたちは勉強しなければならないのでしょうか？」と問い掛けた思いは、その後の私の生き方に確実に影響しています。一つ一つの仕事や一人一人のひととの出会いには必ず意味があり、大切にしたいと思う自分が今いるのは、中学生での主張大会の経験が私の根底にあるからです。

地区大会に向けて、そしてこの県大会に向けて、自分自身の主張と向き合い続けてきた皆さんにとっても、今回の経験は、これからの人生の貴重な財産となり、必ずや自分を高めていく宝物になると思います。

さて、これから皆さんが生きていく十年後の社会は、Society5.0の社会だと言われています。AIと人間が共存し、より豊かに生きていく社会になるといことです。例えば、言葉の違う国の人同士が同時に会話をしたり、体の不自由な人が自動運転の自動車で自由に行動したりすることが、AIの進化によって、十年後には当たり前になっているかもしれません。それほど、AIの進化は、社会に大きな変化をもたらすこととなります。

ただし、どんなにAIが進化しようとも、その技術を作り出しているのは人間です。わたしたち人間は、豊かに生きるために、一人一人が課題を見付け、その課題を解決するための方法を考え、粘り強く試行錯誤しながら取り組み、よりよい答えを導き出すことができます。このことは、まさに皆さんが今回の発表に向けて準備してきたこととプロセスは同じなのです。明日からの毎日の中で、今回のようなチャレンジ精神や好奇心を大切に、何事にも自分なりの考えをもって行動することを続けてください。

最後に、子供たちにこのような成長の場を与えていただいた関係者の皆様、また本日まで丁寧にご指導いただいた先生方、そしていつもそばで見守り、支えてくれる保護者の皆様に感謝申し上げ、私の講評とさせていただきます。



令和5年度 少年の主張石川県大会概要

1 趣 旨

中学生が、日常生活での体験や考えを自分自身の言葉でまとめ、それを広く発表する機会を提供することにより、中学生世代における社会参加意識の醸成を図るとともに、多くの大人に現代の中学生への理解を深めてもらう。

2 主 催

石川県 石川県教育委員会 石川県健民運動推進本部
独立行政法人国立青少年教育振興機構

3 後 援

石川県市町教育委員会連合会 石川県小中学校長会
石川県PTA連合会 石川県子ども会連合会
明るい社会づくり運動いしかわ 石川県青少年育成アドバイザー協会
石川県BBS連盟

4 日 時

令和5年8月27日（日）午後1時30分～

5 会 場

石川県青少年総合研修センター（金沢市常盤町212-1 TEL076-252-0666）

6 出場資格

県大会へ出場する生徒は各地区大会で選出された生徒とし、在籍中学校長へは健民運動推進本部より県大会参加通知をする。

7 発表内容

次に掲げる事項の中で、心からの思い、考えたことや感銘を受けたことなどを、少年らしい自由にユニークに、飾り気のない言葉でまとめたもの。

ア 社会や世界に向けての意見、未来への希望や提案など

イ 家庭、学校生活、社会（地域活動）及び身の回りや友達との関わりなど

ウ テレビや新聞などで報道されている少年の問題行動、大人や社会の様々な出来事に対する意見や感想、提言など

8 表 彰

最優秀賞（石川県知事賞） 1名

優 秀 賞（石川県教育委員会賞） 2名

奨 励 賞（石川県健民運動推進本部長賞） 13名

9 その他

（1）発表内容は、記録集として発表者、中学校長、青少年団体等へ配付する。また、広く同世代の少年及び世代を越えた人々の意識を啓発するために、健民運動推進本部のホームページにも掲載する。

（2）最優秀賞受賞生徒は、独立行政法人国立青少年教育振興機構が11月に開催する「少年の主張全国大会」出場者選考のための全国大会代表審査委員会へ推薦される。

県大会審査基準

1 採点方法

100点満点とし、各項目の配点は次のとおりとする。

- (1) 論旨・内容 60点
- (2) 表現力 30点
- (3) 態度 10点

2 採点上の観点

(1) 論旨・内容について

- ア 鋭い感性で、新鮮な主張であるか（中学生らしさ）
- イ 新しい情報や視点があるか
- ウ 個人の体験にとどまらず、一般性・社会性があるか
- エ 提案や提言を実現・実践する意欲が感じられるか
- オ 論旨が一貫し、構成がしっかりしているか

(2) 表現力について

- ア 聞きやすく、説得力のある話だったか
- イ 話しぶりに熱意と迫力があつたか
- ウ 聴衆に共感と感動を与えていたか

(3) 態度について

- ア 中学生らしく、さわやかで落ち着いた態度であつたか

3 時間超過の場合の減点

各発表者の持ち時間を5分とし、持ち時間を超過した場合はその時間の長さに応じて各審査委員の点数から減点する。（5分30秒以内は減点しない。5分30秒を超え6分以内は1点、6分を超えると2点の減点をする。）

審 査 委 員

(1) 審査委員長 吉田 克也 (石川県市町教育委員会連合会 副会長)

(2) 審査委員 中黒 公彦 (石川県青少年育成推進指導員連絡会 会長)

増野 裕之 (石川県PTA連合会 副会長)

縄 寛敏 (石川県子ども会連合会 会長)

寺西 陽一 (石川県小中学校長会 理事)

東原 修身 (石川県教育委員会事務局学校指導課 課参事)

地区大会概要

(1) 加賀地区大会（加賀市、小松市、能美市、能美郡川北町）

「第42回 加賀地区中生意見発表大会」

主催 加賀地区市町教育委員会

共催 石川県健民運動推進本部

日時 令和5年7月29日（土）13:00～

会場 能美市根上総合文化会館 円形ホール

審査員 二口英一郎（小松教育事務所 所長）

石黒 和彦（加南地区教育委員会連絡協議会 会長）

木下 浩明（能美市教育委員会 教育長）

西河 志津（小松教育事務所 指導主事）

発表者（20名）

タイトル	中学校名	学年	氏名
僕たちにできること	能美市立辰口中学校	3	小池 奏輔
魔法の言葉	小松市立丸内中学校	3	重吉 優楽
感謝	加賀市立錦城中学校	3	宮崎 碧
音楽の力	小松市立松東みどり学園	7	平道 由唯
部活動を通して	小松市立中海中学校	3	亀田 和鈴
守る	加賀市立錦城中学校	3	向本 千晴
生きたい	小松市立南部中学校	3	堀江 花音
おはよう	能美市立寺井中学校	3	喜三 琉成
回せ、経済～未来は自分で変える～	加賀市立片山津中学校	3	西 絢花
AI との付き合い方	小松市立国府中学校	3	今泉 太壺
「私」という性別	小松市立御幸中学校	3	橋爪 にこ
高齢者問題	加賀市立橋立中学校	3	入野 陽奈
自分の殻を破って	小松市立板津中学校	3	熊田 虹湖
未来への贈り物	加賀市立東和中学校	3	桑村 昊
夢への道のり	川北町立川北中学校	3	國雲 みさと
自衛官の家族として	小松市立安宅中学校	3	畠山 雪乃
私にしかできないこと	小松市立芦城中学校	2	若林 明依
海への礼儀	加賀市立東和中学校	3	沖山 絹布子
悪循環を止めるには…？	小松市立松陽中学校	3	大橋 穂野花
私の新しい生き方	能美市立根上中学校	3	西村 唯

(2) 石川中央地区大会 (かほく市、白山市、野々市市、河北郡)

「第33回 (令和5年度) 少年の主張石川中央地区大会」

主催 石川県 石川県健民運動推進本部

共催 白山市教育委員会 石川県青少年育成アドバイザー協会

日時 令和5年8月5日 (土) 13:30～

会場 白山市鶴来総合文化会館クレイン

審査委員 清水 茂 (白山市教育委員会 教育長)

広橋 陵 (石川県河北郡市校長会 津幡町立津幡南中学校 教諭)

久木 恵美 (白山市PTA連合会 運営幹事)

清水絵里奈 (石川県教育委員会金沢教育事務所 指導主事)

宮崎 禮子 (石川県青少年育成アドバイザー協会 会長)

発表者 (15名)

タイトル	中学校名	学年	氏名
見えるもの、みえないもの。	白山市立松任中学校	3	北野 心結
星のような言葉の中から	白山市立北星中学校	3	平村 晴佳
「おもう」を想う	白山市立光野中学校	2	林 彩恵
手紙	白山市立笠間中学校	2	本田 莉瑚
多様性を認めよう	白山市立笠間中学校	1	瀬戸谷 玲奈
言葉と心	白山市立美川中学校	3	市村 結衣
積極思考で人生を豊かに	白山市立北辰中学校	3	江川 遼
ジブンニハクシュ!	白山市立北辰中学校	3	細川 咲
私が変わる「きっかけ」	白山市立鳥越中学校	3	北村 明香里
自分事として考える	野々市市立野々市中学校	3	小西 紗耶
「泣きと笑いはニアリーイコール」	野々市市立布水中学校	3	梅野 愛深
A I と人間が共生する社会	野々市市立布水中学校	3	平山 心結
私の過去と願い	かほく市立宇ノ気中学校	1	浜出 つづみ
多様性を受け入れる	内灘町立内灘中学校	3	石本 千陽
「あとひと口」が変える未来	津幡町立津幡南中学校	3	板井 愛友美

(3) 金沢市地区大会（金沢市）

第76回金沢市「中学生からのメッセージ」発表会

主催 金沢市教育委員会 金沢市中学校文化連盟弁論部

日時 令和5年8月9日（水）13:00～

会場 教育プラザ富樫 121・122 研修室

審査員 二見 和男 NHK金沢放送局キャスター

金沢市内各中学校国語科担当教諭 等

発表者（26名）

タイトル	中学校名	学年	氏名
自分自身を成長させるために	金沢市立高尾台中学校	3	高出 仁愛
人が人に与える感情	金沢市立北鳴中学校	3	西山 怜
自分を信じていいんだよ。認めてあげていいんだよ。	金沢市立高岡中学校	3	細川 幸音
学生の本業	金沢市立野田中学校	3	高山 一洙
社会への扉	金沢市立清泉中学校	3	南 紗希子
同調〇〇	金沢市立城南中学校	3	松浦 芽生
自信の花	金沢市立泉中学校	3	石堂 結
選択するときに必要なこと	金沢市立芝原中学校	3	上梨 成美
ふるさと金沢を愛する心	金沢市立西南部中学校	3	谷 葵愛華
障害と差別	金沢市額中学校	3	八子 紗采
ふたを開ける前に	北陸学院中学校	2	前田 美穂
学ぶ意味	金沢大学附属中学校	3	川口 琳可
自分らしく老いるために	金沢市立紫錦台中学校	3	山本 莉音
自分にできるたった一つのこと	金沢市立港中学校	3	馬場 杏奈
自分自身を認めること	金沢市立犀生中学校	3	野口 知来
少数意見の尊重	金沢市立兼六中学校	3	加藤 大夢
誇りある自分になるために	県立金沢錦丘中学校	3	東 真菜葉
簡単につかえる魔法	金沢市立鳴和中学校	3	西岡 莉奈
私たちが創る社会	金沢市立大徳中学校	3	佐々木 実蕾
金沢SDGsは身近に	金沢市立金石中学校	3	盛 彩花
笑顔の好循環	金沢市立緑中学校	3	梶浦 唯生
「傍観者」からの脱却	金沢市立長町中学校	2	友久 愛衣
「考えない葦」は、ただの葦	金沢市立長田中学校	3	松末 明生
児童虐待のない社会を作るために	金沢市立森本中学校	3	曾田 乙芭
日常の中にある優しさのバトン	金沢市立浅野川中学校	3	舛田 優心
多文化共生の心をもって	金沢市立医王山学校	3	小林 想来

(4) 能登地区大会（七尾市、羽咋市、輪島市、珠洲市、羽咋郡、鹿島郡、鳳珠郡）

「第55回全能登私の主張発表大会」

主催 第55回全能登私の主張発表大会実行委員会、七尾市教育委員会

共催 石川県健民運動推進本部

日時 令和5年8月9日（水） 9：30～

会場 七尾市文化ホール

審査委員 松浦 顕雄（全国高等学校文化連盟弁論部 常任理事）

布川かほる（石川県教育委員会中能登教育事務所指導課 課長）

今井 保（七尾市小中学校校長会 幹事長）

湊口登志子（七尾市中学校文化連盟会 会長）

水谷内良郎（中能登町立中能登中学校 校長）

奥原 真弥（七尾市教育委員会学校教育課 課長）

発表者（12名）

タイトル	中学校名	学年	氏名
「かっこ良さ」の裏には	輪島市立門前中学校	2	菅原 結花
免許返納から考えたこと	七尾市立七尾中学校	3	田村 芹奈
普通じゃなくても	七尾市立能登香島中学校	3	澤田 知歩
私と友達	七尾市立中島中学校	2	保蔵 七彩
個性を生かすには	七尾市立七尾東部中学校	3	川下 真央
あの子になりたい	中能登町立中能登中学校	2	尾橋 史菜
友達と仲良くするために	七尾市立七尾東部中学校	3	達 萌々菜
才能に勝つ	七尾市立能登香島中学校	3	出崎 絢菜
普通と自分の理想	七尾市立中島中学校	3	前田 咲季
偏見をこえて	中能登町立中能登中学校	3	下村 惺羅
「違い」	七尾市立七尾中学校	3	水口 朔太郎
武器をメガホンに	輪島市立東陽中学校	3	登岸 結衣

私が歩む夢への道

鳥取県 米子市立東山中学校 三年 矢曳 未来

私は障がいを持っている障がい者だ。生まれつきではなく、六年前に交通事故に遭ったことで後遺症が残ってしまったのだ。事故後のシヨックで歩けなくなった。記憶力が低下した。集中力が続かなくなり、些細なことで疲れて怒りっぽくなった。私はその後遺症を負ったことで、できないことが増えた。生活に関する不自由、勉強に関する不自由、その他色々なことで前の自分のほうが良かったと思う。最近は何の気持ちよりも、悲しみの気持ちが増えたように思う。

私には二つ上の姉がいる。私は今、中学校三年生だから、高校進学を考えたときに真っ先に頭に浮かんだのは姉だった。姉と同じ高校に行きたいと思った。けれど、それはとても難しい選択だと知っていた。私には障がいがあり、姉とは違うからだ。障がいを負ったことで、勉強に集中して取り組むことが難しくなり、できることよりできないことが増えた私に高校進学なんてできるだろうかと考えた。今は自分の体の状態が少しずつわかってきたからこそ言えることだが、私には普通校進学は難しいのだろうと考えている。けれど、前は変わった自分を受け入れなくなかった。やれば私はできる。元のように戻れると考えていた。そう思って中学校に通ってきたが、今となってはそれも難しいというのを知った。大きくなるにつれ、自分の体がわかってきたからだ。自分を知るといえるのは、辛いことなのかもしれない。私は、そのことを理解したときから、なんだか体の力が抜けて悲しくなってきた。私は、もしかしたら小学校から中学校に上がる時、事故に遭った。前の自分に戻りたくて、姉と同じ東山中学校を選んだのかもしれない。そんな理由で選んだ中学校だけど私は今、その選択をして良かった、幸せだと思う。なぜなら中学校に通っていると、先生たちが私を本当に大切にしてくれているということがわかるからだ。それは、私が今、何よりも欲している気持ちだ。また、中学校に通うことで、同級生と一緒に勉強をすることができた。勉強だけではなく、色々なことに挑戦させてもらった。委員会活動や応援団に参加することができた。そしてこの三年間を通して、私は全てが全て融通が効くわけでは

ないということも知ることができた。

私は大人になったら、支援学校や支援学級の教師になりたい。中学校の先生達が私を大切にしてくれているように、私も教師になったら、支援学校や支援学級の子供達を大切にしたい。生まれつきの障がいがあったり、体が不自由で普通校には通えなかったりする子供達に「あなた達には居場所がある、一人ではない」ということを知ってもらいたい。そのために私は自分を見つめ、自分にできることを探していきたい。だから私は、高校は養護学校に行きたい。養護学校で自分の可能性を見つけ、自分にできること、誰かの役に立てることを探していきたい。

私は最初からこのような考えを持っていたわけではない。最近になってやっと「できない自分」を受け入れられるようになってきたのだ。小さい頃から頑固で、これだと決めれば、周りの人の言うことなんて聞かなかつた。だから事故に遭って同年代の人達より、できないことが増えたということが、ものすごくコンプレックスだった。

けれど、もうそれは過去の話だ。今の私はこうなのだから仕方がない。この考えは、自分ではできないと諦めたのではなく、自分を認めたのだ。私は、私なりの道を歩むことを願う。私は自分の歩幅でゆっくりゆっくり「私の夢」を叶えようと思う。目的地へ時間をかけて進んでゆくカタツムリのように。私の夢はどこまでも続いていく。



毎月第3日曜日は「家庭の日」です
家族とのふれあいを大切にしましょう

石川県健民運動推進本部

〒920-8580 石川県金沢市鞍月1丁目1番地
石川県県民文化スポーツ部女性活躍・県民協働課内

TEL 076-225-1365 FAX 076-225-1374

ホームページ [健民運動](#) で検索

メール kouryu@pref.ishikawa.lg.jp

この冊子は再生紙を使用しています